



読書活動への扉を開く！

No. R6-14

桑村小学校 令和7年1月7日

文責：関口 直

誰もが読書を楽しめる環境を構築していくために

12月17日と19日に、保護者による読み聞かせが行われました。協力してくださいました保護者の皆様、ありがとうございました。子供たちにとって、読み聞かせと言え、マルベリーの方々によるものが定着していて、熱心に聞き入る姿が日常になっています。本の良さを知る上で、とてもいい機会になっています。さらに読書を推進していく上で、保護者の協力は欠かせません。

子供の中には誰からも言われることなく、読書が好きになる子がいます。一方、いくらすすめてもなかなか好きになるどころか、本を開くことすら難しい子もいます。強制できることではありませんが、それでも人生をより豊かに生きていくために読書はとても意義のあることだと考えています。だからこそ、学校としては様々な働きかけ方を通して、本好きの子供を増やしていかなければならないと思います。読書の世界はとても広いです。いろいろな入り方、関わり方があります。「なぜ働いていると本が読めなくなるか」(三宅香帆著)という本が売れているようですが、どんな仕事に就くにしても読書とまるで無縁の世界はほとんどないと思います。生きる力を育むといった観点からも、これからの時代を生きていく子供たちに、読書の楽しさや面白さを伝えていくことは必要です。それも一人ではなく、多くの大人がよってたかって楽しみ方を伝えていけば、誰一人取り残すことなく、読書の良さをわかってもらえるのではないのでしょうか。



先日、図書館に行ったら、読書郵便の展示を見つけました。読書郵便は、お子様がお家の人向けに本の紹介をし、そこにお家の人がかたえるかたちで本を紹介するというものです。桑村小の作品は、どれも力作で、心温まるものばかりでした。町内でもこの親子の取り組みは、桑村小にしか残っていないとのことで、本当に貴重だと感じました。読書に親しむ子供を育てる上で、家庭での読書環境の向上は欠かせません。引き続き、家庭や地域で読書活動を支えてほしいと思います。

ちなみに先程の三宅さんの本では、働いていると必要な情報だけを得るようになってしまい、知りたいことだけでなくノイズも多い知識として読書は敬遠されてしまうとしています。時々、ドラマや映画を早送りして観る人がいますが、ドラマを芸術鑑賞として捉えれば、早送りは考えられない行為です。単純にどんなドラマなのか、情報だけを得たいなら早送りはとても効率的です。でも、それでいいのでしょうかというのが三宅さんの主張です。働きながら本をしっかり読める(「半身で働く」と三宅さんは言ってます)社会こそ健全と言えるのだと思います。学校、地域、家庭が協力して、ゆったりと読書を楽しめる環境を構築できるよう引き続き取り組んでいきます。